

PHD LETTER

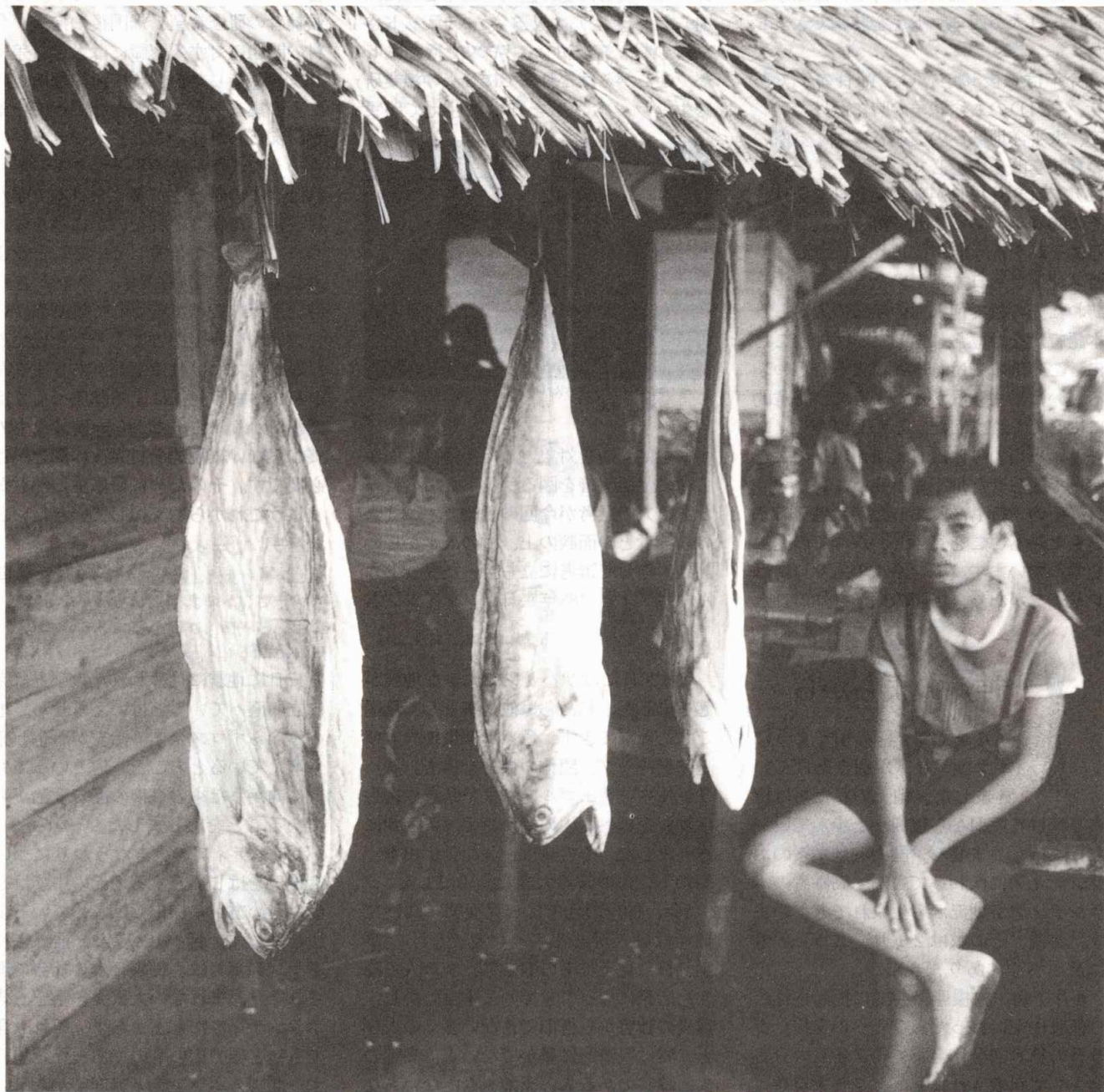
56

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1995・9

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 13期生来日 4 P
- PHDの実践 6 P

発行:財団法人PHD協会
 編集人:草地賢一
 住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
 TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
 郵便振替:01110-6-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
 定価:100円



インドネシア西スマトラ州アイルバンギス

軒先に干し物を吊るした海辺のお店。
 奥には仕事を終えた漁師たち。
 甘いコピ(コーヒー)を飲みながら
 きょうの漁のことを語り合う。
 ゆったりとしたひととき。

西スマトラでの人選

春先には震災でこの夏は海外へのスタディツアーどころではないと思っていました。しかし神戸も少しずつ落ち着きを取りもどし、95年度の研修生も迎えることができ、加えて来年度の研修生選考のためインドネシアには出かける必要があったので参加者は少ないことを覚悟の上で西スマトラへの旅を組みました。そして盆明けに漁業研修指導者、滞在家庭を含む11人が西スマトラを訪ねてきました。

今年には戦後50年という節目の年であり、PHDのもつ戦争の時にかけたアジア、太平洋地域へのご迷惑に対する償いの意味を改めて感じています。インドネシアでは8月17日が独立記念日であり、その50周年ということで町のいたるところにそれを祝う旗が飾られていました。西スマトラも日本軍がいたところですが、訪ねた先の村で何人もの年輩の人から日本語で声をかけられました。幸いなことに、この地域では日本人によるひどいふるまいはあまりなかったようで、好意的に接してくれました。しかしプキティンギという山の町には日本軍が現地の人を使って掘らせた地下壕が残っています。ツアーの一行も訪ねましたが、地元の子どもたちもここを見学し、かつての歴史を学んでいます。トンネルの入り口にはレリーフがあり、当時の様子を知ること

ができます。また帰途立ち寄ったシンガポールでも、占領当時の様子を展示した博物館を訪ね、日本の侵略の歴史を改めて学びました。シンガポールで出会った友人から日本では戦争時の歴史をきちんと教えているのかと尋ねられ、歯切れのいい返事ができませんでした。

さて今回の旅の大きな目的のひとつである96年度研修生の選考を95年2月に帰国したラディアエリタさん（ラッドさん）の村、アイルバンギスで行いました。ここからはこれまでに3人の漁業研修生とラッドさんを日本に迎えています。



帰国研修生ラッドさん（中央）、ヤニさん（右）を講師に候補者と面談。

す。主に女性を対象とした保健衛生面から村の生活改善を図るラッドさんの相棒となる人の選考が今回の目的です。3人の候補者との面談の上、村の人々からの評判、そして選考に立ち会ったラッドさん、ペディ君（88年来日）ファイジン君

5月28日にはサハリンで大きな地震が起きました。私たちは他人事として見過ごすことができず、色々な被災地の人びとやグループ、団体の協力を得て、サハリン州ネフチェゴルスクまで緊急救援生活物資を延べ4人のボランティアと共に送りました。その量は、コンテナ13本、約70トンにのぼる大きなものでした。

今、神戸の地では一見復興へ向けて様々な動きがあるように見えます。事実、目に見えて町の様子も、また人の動きも活発になってきています。しかし、震災の被害から復旧できない多くの人びと、特に経済的に豊かでない人、高齢の人、障害のある人、土地をもたない人などは、そうではない人との格差が明らかに拡大してきています。これらの人びとの立ち直り、立ち上がりについて市民も政府も十分な手当が完全になされているとはいえません。

6月上旬に米国ロサンゼルス市のノースリッジを訪問しました。1年前の同じ1

草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

（同年）、別の村パシルバルーからの研修生ハスマヤニさん（92年）たちの意見を聞き、22才のウピッ・タンジュンさんを選びました。5人兄弟の末っ子で高校を卒業後、正式な先生ではありませんが、小学校で教えたり、村の診療所の手伝いをしたりしています。また、ラッドさんも属するPKK（女性による生活改善のグループ）のメンバーです。3人の候補者の研修希望、帰国後の抱負、今の村の問題に対する認識には大きな差はありませんでしたが、学校、診療所といった人の集まる場所とつながっていること、友だちが多いこと、人づきあいのよさそうなことが決め手となりました。これは過去の研修生が多くを日本で学んで村へ帰った際、それをいかに多くの人にうまく伝えるか苦労していることをよく耳にしてきたからです。ラッドさん自身、今そのことで苦心しています。いかに大切な内容であってもそれを伝える手段が十分でなければ意味がありません。PHDの願う村人による健康づくりは時間がかかります。だから一時的なものに終わらない継続的な村人への働きかけが必要です。そのために研修生の熱意が続くようこれからも支援していきたいと思っています。

藤野 達也

月17日に地震に見舞われた人びとは完全に立ち直っているとはいえません。地震のみならず全体的治安が悪化し犯罪も増えているとのこと。何といたっても復興に向かうための復旧の面で政治が大切であることを感じました。

ボランティアの大きなうねりについても神戸をはじめとする地元の中ではその受けとめ方が多様化ははじめてのように思います。延べ124万人と推計されるボランティアは、従来日本の社会で理解された「恵まれない人に愛の手を」式のボランティアにとどまらず、それも含んでもっと幅の広いものであったと思います。既製のボランティア理解から「いわれなくてもする、いわれなくてもいい」という市民がパブリック・公を形成する社会をめざしていくことが大切に思っています。

阪神大震災地元NGO救援連絡会議
代表 草地 賢一

雨にもメゲず、暑さもコラエて、イッパイ学んだ 第5回林業体験合宿「枝打」 報告

林業を体験しながら日本の林業の現状を知ると同時に破壊の進む熱帯林の現状を考えようというプログラム「枝打」も今年で5回目を迎えました。今年は3回に分けて行うこととなり、Part1は7月2日、Part2は7月21日～23日に行いました。作業は財団法人大山振興会が管理する山林で、篠山林業事務所の方々のご指導にて行いました。また、学習会では研修指導者でもある渡辺省悟さんなどから日本の林業の現状について、ウータン・森と生活を考える会のメンバーからマレーシア・サラワク州で進んでいる熱帯林破壊についてのお話を伺いました。Part3は11月に行い、間伐材の加工や山歩きを予定しています。

作業は下草刈りが雨天のためできなかったものの、枝打ち、間伐のほか、今回初めて育成天然林施行を行いました。これは天然林や永らく放置されて雑木が生えているような林を手入れし、利用価値のある木は残していこうというものです。作業ではヤマツツジ、サルトリイバラなどが生い茂り、真っ暗になっている山森を適当な明るさになるまで除伐し、松茸が生えるような環境を作り出すというものでした。

昔の日本では雑木は薪として、また落ち葉が積もって腐葉土と化したものはたい肥として利用していましたが、薪が石



学習会では私たち自身への問いかけがなされた。

油・ガスに、たい肥が化学肥料に取って代わられるにつれ、人々の生活が森から切り放され、山は荒れていったということです。

学習会では森林の果たす役割や林業経営の厳しさについて説明を受けました。

「外大発 アジア経由 お百姓」

僕は神戸市外国語大学を今年卒業し、現在百姓見習いです。大学に入ったころは内気なせいで外交官になろうと思っていました。しかし忘れもしない運命のある日、1991年6月×日（忘れた）PHD協会に足を踏み入れてしまったのです。神戸に出てきたばかりの田舎者の僕は、ピーエッチデーというなんだかアヤシゲなメリケン言葉の響きにひかれてついうっかり門をたたいてしまいました。でなければ今ごろは、外交官だったはずです。

最初のキッカケは、研修生との出会いです。日本のマチで育ち、6・3・3で12年の学校生活のなかの人間しか知らなかった僕は、アジアのムラの学校もいってない生粋のお百姓さんに会って、ああこういう人もいるのか、と思いました。

次のキッカケは、草の根生活塾という農業体験合宿でした。牛、卵、野菜の生産現場をほんの少しだけ見学体験させてもらって、食べるものを作るというのは

こんなに大変なことだったのかと痛感しました。

その他たくさんさんのキッカケがPHDの活動との関わりの中でありましたが、僕が百姓になりたいと思うようになった一番のキッカケはたぶん、今まで出会った一次産業に携わる人たちの手がすべて、キタナイゾーキンのようなゴワゴワの手をしていたことです。でも僕にはそれが働き者のキレーな手（引用）に見えました。なんてカッコイイんだと思いました。自分のキレーでシラウオのような（ちょっとウソ）ナヨナヨの手を見て心から情けなくなりました。こんな手の奴はメシを食う資格はないと恥じ入りました。そして、強く強烈にごっついすごくどえらい「自分の食うもんぐらいは自分で作らなきゃ」と思い、今では百姓見習いです。

今の便利な生活は、すべて何らかの犠牲の上に成り立っています。車に乗るのも、エビ一尾食べるのも、紙一枚使うのも、必ず何かが犠牲になっています。それは自然や動物や人間であつたりします。

アジアの研修生たちの話を聞いて、そ

森林は雨水を保つダム役目を持っており、洪水を防ぐと同時に、都市に住む人々へ水を安定的に供給しています。でもその森林を管理していくには地元の人々による絶え間ない努力が必要ですが、都会人にはこのことがほとんど理解されていないのが現状です。

また、熱帯林学習会ではサラワクの森に住む人々の生活が森林伐採によって危機に瀕している様子を説明したビデオを上映したり、日本では輸入木材がコンクリートの型などに使用されているが、使い捨て同然の状態であることが報告されました。

今回の体験および学習を通して都市と農村の関係、そして日本とアジアの関係を、わたしたち一人一人が見直して行かなければならないことが確認されたことと思います。

して今ムラと言われる所に住んでみて、自分の生活が何を犠牲にしているか知らないということは恐ろしいことだ、とつくづく思います。

もともと生きるとは殺して奪うことです。生命は他の生命を犠牲にして生きていくものです。トマト一つ、卵一コ食べるのも、殺して奪ったことになります。でもそれは生きていくために必要な犠牲です。有機農業を勉強してみると、自分の生活のために何が犠牲になってくれたかがほんの少し見えます。マチに住んでいるのはこれは分かりません。

ですからせめて、何かが犠牲になっていることだけでも知っていてほしいと思います。それにしても、今の世の中ムダな犠牲が多すぎます。この現代日本人を成り立たせている犠牲をなるべく少なくするには、みんなが自分の食う物は自分で作ったりとったりする事だと僕は信じています。そうすれば、世界のいろんな矛盾、飢餓、貧困、格差、差別は、きつとなくなると信じて、僕は今日も、種を播きます。

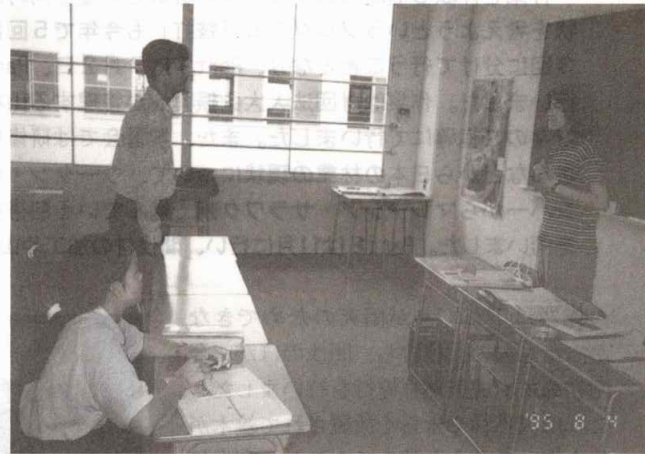
浅田 大輔

研修生レポート

震災の影響で来日が延期となっていた第13期研修生2名が、7月30日無事に関西空港に到着しました。

来日してからは、健康診断～オリエンテーション～外国人登録～ホームステイ開始～日本語研修というようなスケジュールで動いています。言葉が通じないために来日当初は朝食から就寝までボランティア、職員総出でつきっきり。神戸YMCAでの日本語研修に入ってから、滞在家庭から学校まで、学校からPHDまでの電車の乗り方、道順を覚えなければならず四苦八苦。現在は日本語研修も順調に進み、落ち着きが見えてきています。

さて、研修生と出身地域の紹介を中心に今回の研修レポートをお送りします。



まずは日本語で自己紹介／神戸YMCA

ビショジョティ・サブコタさん (ネパール)

बिश्वज्योती सापकोटा

約10年ぶりのネパールから9人目の研修生。奥さんと4人の子供がいる29歳のお父さんです。第1期生(82年7月～83年7月)として、1年間農業を中心に学んだバト・ビスタさんが帰国後につくったグループ「サマ・セワ・サムハ」(社会奉仕グループの意)にボランティアスタッフとして所属しながら農業で生計を立てています。

ビショさんの暮らすナウピセ村は、首都カトマンズから北東に約60kmの距離にある農村です。人口は278人、65世帯で構成されています。ほとんどの人が農業で生活をしていて、生活はほぼ自給自足です。時折必要な教育費、衣料費等のための現金は、最寄りの市場(クンタ村・徒歩15分)で野菜を売り、稼いでいます。

村に電気が来たのは、1年前。ビショさんの家にもつきました。燃料は薪を用いていますが、最近近くの山の木が少なくなり、市場で購入したり、とうもろこしの芯等も利用しています。生活用水は、村に4つある小さなため池を



ホストファミリーの森田さん宅でくつろぐビショさん／神戸市須磨区

利用しています。

診療所はクンタ村にあります。これは、サマ・セワ・サムハが運営しており、お医者さんはいませんが看護婦さんが2名いて、お産の補助と下痢程度の簡単な疾病には対応できます。大きな病院はクンタ村からバスで3時間かかる(それも雨が降ったら動かない)町にあります。遠いことと、治療費が高いためにあまり利用されていないようで、治療を受けられずに死んでいく子どももいます。病気になった時は、村の祈祷師のおほらいや、薬草、市販薬で済ませてしまうことが多いようです。

卵一個4ルピー、米1kg22ルピー、鶏肉1kg115ルピー、タバコ20本20ルピーがここ最近の物価です。

ナウピセ村の農業は、お米と日本と同じような野菜が栽培されています。ただ、昔ながらの方法で土地を休ませることなく栽培していることもあって、土地がやせており、収穫量も減ってきています。

このことから、ビショさんは家畜を活用した小規模な複合経営を学んで土地を「健康的」に有効活用することを考えたいと話しています。



チル・カエウさん (カンボジア)

គីល កែវ

93年度に11期生として農業を学んだスム・ソコムさんとノップ・ヴァナさんに続くカンボジアから初めての女性研修生。村で農業を営む両親と4人の兄弟と一緒に暮らし、成人を対象とした識字教育にボランティアとして関わっています。

家族の中でひとりも母国語の読み書きができないということはまずありませんが、実際の識字率は約40パーセントぐらいだそうです。農業や保健衛生も題材にしています。

カエウさん出身のタケオ県バティエ郡は、首

都プノンベンから南に約40kmの距離にあり、15のクム(郡<スロク>)の次の行政区分で「町」に相当して構成されています。カエウさんの村はカンダングクムの中のクロサング村(プム)です。

村人は農業で生活しています。主な農作物はお米と野菜。ベトナムに続くメコン川流域の肥沃な土地柄ですが、最近農業、化学肥料の使用量が増えてきているそうです。ほぼ自給自足の生活なので極端な栄養失調はないそうですが、ボーダーライン上の人が多いです。食生活は、いちばん質素なもので米と近所で採れる豆、野菜、魚の塩漬けなどが中心です。田んぼで採れる小魚が貴重なたんぱく源となっています。

診療所は各クムにひとつありますが、医者が



常駐する病院は約6km離れたチョンボッククムにあります。村人が病院での治療を受けることは少ないそうです。

雨期には水不足と水質汚濁のための下痢、乾期にはマラリアや腸チフスといった病気が多く



カエウさんの滞在先、真島さんは3人家族／神戸市北区

なります。

カエウさんは、ソコムさん、ヴァナさんとの話し合いも踏まえて、保健衛生、特に乳幼児、妊産婦の栄養、衛生管理を中心に学んでいきます。またバランスの良い食事をとるために多様な野菜を栽培していく必要から農業についても関心を寄せています。

参考文献

JOGSフォーラム No. 12 (92. 12)

No. 13 (94. 3)

No. 14 (95. 4)

日本キリスト教海外医療協力会

9期 ラニー・サイロンさん (ババ・ニューギニア)
私と家族は元気です。小さな畑仕事と服を作っています。私の所に習いに来る女性はほとんどいません。村の女性はあまり勉強したくないようでした。

今、いろんな服を作ったり、いろんな料理を作ったりしながら村の人に見てもらっています。そうしたら今まで興味を示さなかった女性たちがかかると思うので、しばらく続けていきたいと思っています。[ま]ち [ば]ち [り]こ
You're much love for you
Lanne Sailang (5- 弟さん)
Papua New Guinea.

インドネシア 帰国研修生レポート

8月19日から27日まで、職員の藤野、小松がインドネシア、西スマトラ州を訪ねました。帰国研修生たちの活動について報告します。

ユリ・タムリンさん (86年)
西スマトラ州漁業振興部の職員として、漁村の支援に取り組む。子どもは3才と1才。

アリ・ムルティムさん (87年)
新しく十数人のグループをつくり、州からの支援で3隻の舟が与えられた。第二子が奥さんのおなかに。

ハスリ・ペディさん (88年)
アイルバンギスで漁師を続ける。8人乗りの舟にのり、イワシ中心の漁。娘は4才、息子は2才に。

モハメッド・ファイジンさん (88年)
アイルバンギスでの漁師と、村から町への魚の出荷する商売とのかけもち。独身。

アフナルさん (88年)
バンドンの大学で勉強中。来年スマトラに戻ってくる予定で、今回は会えず。

サムスアリスさん (91年)
パシルバルー村で漁師を続ける。8人乗りの舟の船主で、村の漁師のリーダー格。6ヵ月前から池での淡水魚養殖も始める。17才から2才まで8人

の子ども。
ハスマヤニさん (92年)
組織だった保健衛生の普及活動は仲々難しく友人を通じ少しずつ広めている。家計を支えるため週に3回、町の会社の仕事に。刺しゅうも収入源のひとつ。

セニフィタさん (92年)
7月に出産、母親に。今は育児におわれる。それまでは近くの町で月2回栄養の話をする機会があり、好評を得た。

ラディアエリタさん (94年)
村に戻って7ヵ月。どうやって日本の研修を村の人々に伝えるか模索中。村の婦人グループ(PKK)がその基盤となる。

アジアの風便り

10期 ジャンタ・ラル・パライジャさん (スリランカ)
[Handwritten notes in Sinhala and English]

12期 トウトウンさん (ビルマ)
[Handwritten notes in Burmese and English]

9期 ラニー・サイロンさん (ババ・ニューギニア)
[Handwritten notes in English]

6期 ウラヤ・ジツジョンさん (タイ)
[Handwritten notes in Thai and English]

私の地域でPHD ～こんなふうに使ってます～

前号に同封のカラーパンフレットでもご案内しましたが、PHDでは全国各地で取り組んでいただけることがいろいろあります。ここではその中からふたつの例をご紹介します。

夏休みで神戸に帰省中、事務所を訪ねてくれた美木朋子さんに、この6月行った学校祭バザーへのPHD出展について話を伺いました。

編集部（以下編）：なぜバザーを？
朋子（以下と）：PHDの事務所から遠くなって、関係が薄くなるのは淋しいし、離れていてもPHDに関わっていくには何をしたらいいかを考えて、タイのカレンの布を中心にしたバザーにしてみました。PHDが好きだし、何か関わりを続けてたら、神戸に帰った時、事務所にいきやすいやん。それにタイの村に行ったから作った人のことも知ってるし、村の女の人が織る布に愛着があるし、たくさん日本の人にも知ってほしいと思って。



右が朋子さん/学校祭バザーにて

私はかえって都会の人より東北の人のほうがアジア人々の生活のことが分かると思う。気持ち的にか、原風景として近いものがあるんじゃないかなあ。ただ情報と身近に感じるチャンスが少ないだけ。
編：そんな時にはPHDを使ってもらえると嬉しいですね。

<美木朋子さん>

神戸出身で、現在岩手県の看護短大2年生。高校時代にPHDの夏の合宿に参加、以来事務所にも出入り。タイへのスタディツアーに参加し、完全にはまる。

お声がかかれば、研修生だけでなく職員も、ゲームやスライドといった体験するもの、視覚教材などを取り入れて、PHDの活動紹介や国際協力、交流についての話をします。ある日の出前講座。

大阪の松原市にある府立松原高校は創立22年目の地域に支えられた高校です。これまで平和・人権教育を根本にすえた教育活動を行ってきましたが、この度大幅な自由選択・少人数授業をとり入れて地域総合性高校へ衣替えしようと考えています。教科の枠組みを超えて「エスニック講座」「ソーシャルケア・セミナー」など多くの自由選択授業をスタートさせています。

これらは「国際化」「高齢化」「情報

化」社会に生きる自立した人材を育てるため準備しているものですが、その為には国際理解教育や開発教育の視点は欠かせないと思うようになりました。そこでPHD協会の職員藤野達也さんをお招きし、教職員研修を持ちました。8月4日、ヒロシマ原爆投下日を前に、かつて日本の侵略の犠牲となったアジアとどんな関係を持つべきかという問題意識も重ねて「戦後50年-アジアとの新しい関係を求めて」というテーマでお願いしました。

PHDの活動説明に始まり、日本の暮らしがアジア諸国の犠牲の上に成り立つ事など氏の明快なお話は教職員の興味を惹くに十分でしたが、その上に「GAIN AS MUCH AS POSSIBLE（できるだけ儲けましょう）」というゲームがありました。他のグループと協力して儲けるか、自分のグループの利益のみを追求するかという選択を問うものでしたが、だまされるグループが続出し、相互不信や非難が飛び交う事態となりました。

教職員間の協力と団結が売り物の本校内に、ゲームとは言え、一見ヒビが入ったように感じましたが、藤野さんのフォローにより、そうした自己意識の問い直しを繰り返して、その人（地域）の潜在能力をひき出すことこそが教育であるという重要な指摘を知らないうちに学べたと感じています。

日頃私たちは何かにつけ、生徒に対し「こうあるべき」、「こう考えなさい」という態度をとりがちですが、「何でそう思うの?」「自分ならどうする」という問いかけこそが求められているのだと思われました。そんな姿勢こそ、自己と他者を、つまり日本とアジアを理解していく鍵があるのだと感じることが出来ました。

高校の将来を考える上で非常に有意義だった今回の研修をふまえて、次は、これから生きる高校生に、アジアの研修生との出会いの場を持ち、アジアと触れ合い、現在と将来の自分自身を見つめ直す機会を作りたいと思うようになりました。

松原高校教員 平野智之

これなら私のところでやれる、やってみたいと思っていただけると嬉しいです。皆さんの地域やグループに合った方法で、PHDをどんどん活用して下さい。新しいアイデアも待っています。

PHD NEWS

<会費・ご寄附寄託状況>

1995年6月	188件	1,612,500円
7月	420件	6,315,852円
	608件	7,928,352円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

<震災復興募金ご報告>

前号で3月末までをご報告した震災復興募金は6月30日でひとまず終了させていただきました。

4月以降は25件175,500円いただいております。心より感謝いたします。なお、この金額は、会費・ご寄附寄託状況の報告に含まれています。

<被災地支援プログラムご報告>

被災地の子どもたちにリフレッシュしてもらおうと、「農業体験日帰りツアー」を実施しました。

5月7日	小野市	ふえろう村塾	19名参加
5月21日	春日町	中野宅	23名参加
6月11日	丹南町	原宅	21名参加
6月25日	丹南町	渡辺宅	22名参加
7月9日	小野市	ふえろう村塾	17名参加

日頃、研修生がお世話になっている兵庫県下の農家のご協力を得て、行いました。ありがとうございました。

<今年もやります！>

第12回タイスタディツアー

日本での研修を終え、帰国した北タイのコマさん、プリチャーさん、東北タイのワラヤさん、サンコムさんたちを訪ね、村での生活体験、村の人たちとの交流を通して、国際協力のあり方について考えます。

日程	12月23日～96年1月2日	10泊11日
コース	大阪-チェンマイ-北タイ-カレンの村-東北タイ-バンコク-大阪	
定員	13名	定員になり次第締切り
費用	約19万円	

<東日本研修旅行のお知らせ>

各地でご支援下さっている方々を訪ね、交流会、学習会を行う恒例の行事。北陸、関東、東海の各地域を回る予定です。交流を希望される方のお問い合わせをお待ちしています。コース決定後、近隣の方々にご案内します。

時期	12月上旬
	13期生2名と職員が車で移動します。

<第9期関西NGO大学が開講します>

国際理解、国際協力入門講座として好評のNGO大学が今年も始まります。9月から来年2月までの各月1回の計6回、1泊2日で行われます。今期のテーマは「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」。昨年に続き当会職員藤野もまとめ役で参加します。

第1回	私はだあれ?	9月23-24日
	発題者 雨森孝悦	
第2回	豊かさって何だろ?	10月21-22日
	発題者 レックス・バンド	
第3回	足もとから見直そう	11月11-12日
	発題者 宮内泰介	

申込み、問合わせは関西NGO大学事務局まで。
〒550 大阪市西区土佐堀1-5-6 大阪YMCA 国際・社会奉仕センター内
TEL 06-441-5598 FAX 06-443-0739

<ワンワールド・フェスティバル'95>

今回で3回目を迎える国際協力のまつり、ワンワールド・フェスティバル。今年は会場が変わりますが、例年同様、民俗芸能、パネルトーク、第三世界ショップ、エスニックフード、パネル展など出し物は盛りだくさん。PHDもバザーなどの出店を予定していますので是非あそびに来て下さい。当日のお手伝いも大歓迎です。

日時	10月15日(日) 10～16時
場所	大阪・鶴見緑地 (入場無料、雨天決行)

<パプア・ニューギニアのレゲエを聴こう>

この秋のAPEC(アジア太平洋経済協力)大阪会議の記念事業として行われる文化交流行事「大阪大航海」にパプア・ニューギニアの人気レゲエグループ、レックス・バンドがやってきます。彼らはPHD研修生レルさん、ヘルペさん、ラニーさんと同じ地域に住み農業を営む一方で、大ヒットをとばすユニークなバンドです。公演日程は以下の通り。

10月27日(金)～29日(日)	時間未定
大阪・京橋ツイン21ギャラリー・入場無料	
(最寄り駅 JR環状線京橋駅)	
詳しくは「大阪大航海実行委員会」まで。	
TEL 06-942-2003	

神戸でも被災地慰問公演の予定があります。こちらも入場無料です。
10月21日(土) 14:00～地下鉄西神南駅前セリオ 16:00～名谷駅前パティオ

〇月×日のPHD協会

職員 草地 地震の被災地の子どもとの交流プログラム参加者を引率し、米国ロサンゼルスへ。いつもと方向が違うので迷わぬように。

職員 藤野 会費を届けに事務所に立ち寄られた、久しぶりだけど、かなり親しい客人を前に、名前がでてこないため領収書がきれなくて四苦八苦。

職員 小松 スタディツアーに同行し、インドネシア、スマトラへ。訪ねた村の海にTシャツ、短パン姿で突入、村の子どもたちの人気者に。

<アジア市民フォーラム'95ヒロシマ>
市民手作りの国際協力、交流イベントです。過去数回各地でも行われてきており、今年は広島県で開かれます。

日時 1995年11月3日～5日
場所 広島県山県郡千代田町 千代田パークホテル、千代田町公民館ほか
募集締切 9月30日
詳しくは、市民とアジアをむすぶ国際フォーラム'95ヒロシマ実行委員会事務局 まで。
〒730 広島市中区上幟町8-33流川教会内 TEL&FAX 082-211-0855

<旧の郵便振替口座を閉じます>
PHDの活動が始まった当初、開設しました下記の口座を95年12月末で閉じることになりました。

閉じる口座番号 神戸9-23625 「PHD基金事務局」

なお、会費、寄附等のご入金には、01110-6-29688 「財団法人ピー・エイチ・ディー協会」をご利用下さい。

<カレンの布のしおり、増刷しました>
「タイ、カレンの草木染、手織り布のご案内のしおり」を増刷し、この会報に同封しています。

しおりにお目通しいただき、記念品や誕生日プレゼントなどのおつかいものや地域のバザーにどうぞ、お使い下さい。ぜひ一度、手に取って触れて下さい。きっと自然のやさしさが伝わってきますよ。



職員 吉岡 心待ちにしていた研修生を迎えに関西空港へ。Gパンで待つところにスーツ姿のビショさん到着、一本とられる。

職員 渡辺 新規導入のコンピュータ編集ソフトを手なずけ、広報物の版下作成を全面的に担当。コンピュータの鉄人となる。

国内研修生 宮田 研修開始から4ヵ月。研修、啓発、総務と様々な体験が続くも一番の不得手は電話対応とか。みんな彼女に電話しよう。



編集後記

大阪ボランティア協会によるサマーボランティアを通じて、PHD協会に計6日通わせていただきました。PHDの刊行物、職員さんやボランティアの人たちの話、PHDの空気というものは、サマーボランティアの期間だけではなく、これからも自分から関わっていきたいと思うものでした。

そうする以前は、「ボランティア」という言葉に対してわだかまりのようなものがあつたのですが、ボランティアの見えるようで見えてこないものに強く好奇心を持ち、「エイ」と、とりあえず飛び込んでみることにしたのです。

ボランティアには陰湿なもの、魔法のようなものがある訳ではなく、私にとっては、吸収できることがある、視野を広げていくものであるように思えました。そして他のボランティアの人たちにしても、各々のボランティアに対する接し方があるように思えました。

団体のしようとしていることに興味を

持ちやって来る人たち、もっと気軽にやって来る人たち、様々だと思います。しかしその中で、自分に響くものがあつたら、ボランティアの一言にこだわることはないのだ、とPHD協会に来て思えました。

最後に研修生であるビジョさん、カエウさんのこれからは大いに期待し、足繁くPHDに通いたいと思っています。

池田 佳恵

〈編集メンバー〉

秋岡 良子、池田 佳恵、越智かおる、
杉岡 佳美、前田 生子、宮田 早夏、
山本 愛子、

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。